

図書紹介・New publications

**Ictiofauna Demarsal y Aspectos Biogeográficos de la Costa Sudoccidental de África (SWA/NAMIBIA).** Domingo Lloris. 1986. Monogr. Zool. Mar., 1: 9-432, 228 figs.

本書は1979年から1981年にかけて、BENGUERA I~IV EXPEDITION と銘うって行われたスペインの Instituto de Investigaciones Pesqueras de Barcelona (現在は Instituto de Ciencias del Mar, Barcelona) による南西アフリカ(ナミビア)沖の科学調査のうちの魚類についての研究結果である。Monografías de Zoología Marina. Volumen I. Pisces (本書) から始まって、数年以内に本調査の研究結果は Porifera, Crustacea, Cephalopoda, Gastropoda, Bivalvia, Pycnogonia, Echinodermata, Cnidaria, Nematoda, Annelida, Tunicata の順に出版される予定である。

本書では BENGUERA EXPEDITION のトロール網による採集物をもとに、商業漁業によるものをも補助的に加えて、約200種の魚類をとりあげている。最初に調査方法と南西アフリカ沖海域の特徴およびそこに分布する魚類の生態的・漁業生物学的特徴についてかなり詳しい考察がされている。それに続く載録魚類に関する検索は科のものが示されているのみである。各魚種の記述はほぼ完全に魚類学的な記載に限定されていて、漁業とか漁業生物学的なことにはほとんど触れていない。写真をもとにして描いた各魚種の図は単色ではあるが、かなり正確である。最後に海底地形および海流や水温分布などの海洋学的諸条件を考慮に入れて、南西アフリカ沖の底生魚類相の特徴の考察と本調査によって明らかにされた各魚種の垂直分布図とによって締めくくられている。ただし、ナミビア側との協力なしに調査が行われたので、調査海域は領海外に当たり、従ってほぼ100m以深に生息する魚類のみがとりあげられており、ごく沿岸性の魚類はここでは扱われていない。

通読して感じたことは、①我国に比較的知られていないスペインの海洋生物学調査の現状が良く分ったこと、②スペインの魚類学研究の水準がかなり高いと思われること、③スペインの印刷・製本技術の質が相当に高いこと、などであった。本書は ICM, Barcelona の2人の著名な魚類学者、Domingo Lloris と Jaume Rucabado の協力、即ち Dr. Lloris の博士學位論文を Dr. Rucabado が編集する形ででき上がったものである。なお直接下記へ申し込むことによって本書を市価より安く購入できるとのことである: Biblioteca, Instituto de Ciencias del

Mar. Paseo Nacional S/N, 08003, Barcelona 5, SPAIN (6,000 ペセタ≒5,000 円)。

(中村 泉 Izumi Nakamura)

**Commercial Sea Fishes of India.** P. K. Talwar and R. K. Kacker. 1984. Zoological Survey of India, Calcutta. lii+997 pp. 150.00 US\$.

本書は1962年に出版された "An aid to the identification of the common commercial fishes of India and Pakistan, by K. S. Misra" が出版後間もなく絶版になったので、その改訂版として1977年頃から出版が計画されてきたものである。筆者が1980年初頭にインドのケララ州コーチンで開催された FAO workshop に参加した際にはすでに原稿の大部分は完成して、参加者の一人であった Dr. Talwar 自身がそれをたずさえて来て、各国から参加した専門家達の批判を求めて訂正加筆をしておられた。それから4年余を経て(私の眼に触れたのは7年後になるが) 陽の眼を見たことになり、ついに出版されたのかとの感概を覚える。

インド沿岸の海産魚類の種類数は約1,400を数え、本書にはその約40%に当る548種(235属, 88科)の重要海産魚類が記載されている。載録種は Nelson (1976) の分類順に記載されており、各分類群毎に載録されていないものをも含めた検索があるのは便利である。また370の図と数枚の原色写真が付されているのは、やや簡単に過ぎるくらいのある検索や記載を補う効果は大きいのだが、あまりにも出来、不出来の差があり過ぎるのが難である。詳しい synonym lists はむしろ現行の senior synonym を挙げるにとどめて削除してしまい、もっと本の題名にふさわしい漁業や生態に関する情報を入れた方がよかったと思う。そうすれば Handbook (中表紙には Handbook: Commercial Sea Fishes of India とある)らしいページ数(厚い紙質の約1,000ページはいかにも重い)になったであろうと惜まれる。とは言え、Day (1875-1878, 1889) や Misra (1962, 1969, 1976a, b) 以来絶えてなかったインドの海産魚類を概観するものとして重宝なものである。

引用文献

- Day, F. 1875-1878. The fishes of India: being a natural history of the fishes known to inhabit the seas and freshwaters of India, Burma and Ceylon. Taylor & Francis, London, 778 pp.  
Day, F. 1889. The fauna of British India, includ-

ing Ceylon and Burma. Fishes. Vols. I-II. Taylor & Francis, London, xiv+508 pp.  
 Misra, K. S. 1962. An aid to the identification of the common commercial fishes of India and Pakistan. Rec. Ind. Mus., 59(1-4): 1-320.  
 Misra, K. S. 1969, 1976a, b. Pisces. The fauna of

India and adjacent countries. Vols. I-III (Second ed.). Manager of Publications, New Delhi, 276 pp., 438 pp., 376 pp.  
 Nelson, J. S. 1976. Fishes of the world. John Wiley & Sons, New York, xiii+416 pp.  
 (中村 泉 Izumi Nakamura)

会員通信・News and comments

第4回魚類分類談話会のこと

Fourth Seminar for Systematic Ichthyology  
 in Maizuru, Nov. 6-8, 1987

舞鶴の京大農学部附属水産実験所で、第4回魚類分類談話会を行いましたので、その内容を簡単に紹介しておきます。

日程は 1987 年 11 月 6 日の午後 6 時から夕食談話会、7 日午前 9 時から午後 6 時まで研究発表会、午後 6 時 30 分から懇親会、8 日午前 9 時から 10 時まで西舞鶴魚市場見学、11 時から 12 時 30 分まで研究発表会、1 時すぎから標本観察会で、参加者は 36 名でした。以下にそのプログラムと内容について記します。

1. スズキの骨形成を中心とした形態形成について。  
 河村功一 (京大・農)
2. 沖縄近海より採集されたシャチブリ科の一種と思われる幼魚の形質について。  
 戸田 実 (沖縄海洋生物飼育技術センター)
3. サケ属魚類の集団構造と回帰性。  
 岡崎登志夫 (養殖研)
4. 日本産イソズミ属魚類の分類。  
 坂井恵一 (金沢水族館)・中坊徹次 (京大・農)
5. ネズッコ属魚類の分類と分布。  
 中坊徹次 (京大・農)
6. 海産魚類の生物地理について。  
 望月賢二 (東大・総資)
7. 知多半島第三系からの深海魚類群集・その 2。  
 大江文雄 (愛知県教育センター)
8. ヨーロッパの自然史博物館紹介。  
 中村 泉 (京大・水実)
9. 琵琶湖の魚類相の成立—新生代コイ科魚類相の変遷。  
 中島経夫 (朝日大・歯)
10. 中国魚類学事情。 栗 佩琦 (中国水生生物研)  
 河村氏はスズキ稚仔魚(飼育魚)の内部骨格を各骨要素別に追究し、形態形成における変態期について述べられた。戸田氏は 1987 年の 8 月に沖縄本島本部のサンゴ礁外縁水深 6 m のところで採集された特異な形態をした幼魚について述べられ、諸形態からシャチブリ科の一種ではないか、との考えを示された。岡崎氏はサケ属魚類

の集団構造について集団遺伝学的に行ってこられたこれまでの研究結果を、大変わかりやすく話された。特に集団構造と生活史との関係は大変興味深かった。坂井氏と中坊は日本産のイソズミ属魚類を 4 タイプに分類し従来の和名のある 3 種以外にもう 1 種の存在を示した。中坊はインド・西太平洋に分布するネズッコ属魚類を暫定的に 30 種に整理し、類縁関係と分布から発祥地の推定を行った。望月氏は海産魚類各種の分布域がどのような変遷を経て現在に至ったのか、を明らかにするための生物地理学的方法についていくつかの例をまじえながら話された。大江氏は愛知県南知多町師崎層群山海果層から産出したフサカサゴ科キチジの近縁種の化石を紹介され、当時の堆積環境は水深 150~500 m で寒流系の卓越する大陸棚斜面域ではなかったか、と述べられた。中村はバリの国立自然史博物館を中心にヨーロッパの自然史博物館を風物詩風に、ラマルクの銅像等をまじえてカラーライドで紹介した。中島氏は琵琶湖のコイ科魚類相の歴史を、化石の資料をまじえ、琵琶湖の位置と深さの変遷に関係づけて説明され、現在の琵琶湖に生息するコイ科を中心とする固有種の成立課程と、現在中国で繁栄しているコイ科魚類相は中新世初期に日本列島のあった地域から分布を広げていった可能性があるという説について述べられた。コイ科魚類の分類の専門家であり、中国科学院水生生物研究所に所属され、現在中島氏の朝日大学歯学部にて研究員として来日中の栗女史は中国の魚類学に関係する研究所・大学、そして学術雑誌の紹介をされ、さらに中国の魚類分類学の現状について述べられた。Mayr 流の進化分類学が普及していた中に最近では岐分分類学が入り込み、研究者にかなり動揺を与えているとのことであった。中国では Mayr 他 (1953) の *Methods and principles of systematic zoology* が中国語に訳されているそうである。わが国では Mayr は 1 冊も訳されていない。栗女史に、そういうと大変驚いておられた。

今年は、ひとつの発表につき約 1 時間をあてましたので、じっくりと話をきかせていただき、また、質疑応答の方も比較的活発に行うことが出来ました。

(中坊徹次 Tetsuji Nakabo・  
 中村 泉 Izumi Nakamura)